

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	随筆 龍南愚言 : 文苑
Author(s)	春山, 定
Citation	龍南, 177: 113-116
Issue date	1921-03-10
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/7771
Right	

筆隨
龍・南・愚・言

春 山 定

我々が人生の行程に於ける自己と社會との接觸關係を思考し、自己の内面生活を改造したいと云ふ欲求を満たすのは只我々の内的經驗によつてのみである、而かもその内的經驗を得る最も旺盛な時期を偶然にも實際各人の運命の道程中に於ける偶然の一致點ではあるまいかと思はれるのだが龍南と云ふ一つの生活圈内に座を占めたことを我は空虚には考へ得ないで人生の基點をなすと云ふ點に於いて最も評價せられなければならない。而かして此の一事が「龍南」と云ふものの存在の意義をなすのである。我々が感激を以つて愛する龍南と云ふものは此處にその本体を置く。龍南を愛するのは自己を愛することであらねばならぬ。今更

事新しく述べたてゝ必要がないとして、さて、吾人は只抽象的に「愛龍南」を高調して能事終れりとするは出來ない、抽象は稍々もすれば形式に流れ易い。我は百度「愛龍南」を洩らしたとて、只一度の龍南を向上せしめる行爲そのものとは及ばない。

私は龍南を——我々の思想の郷土である所の——愛するが故に今のまゝの龍南に決して満足する事が出來ない。私が第一に望むのは形式を脱した、我々自身が、眞自我によつて創造した龍南であらしめたい。我々の生活をして思想の暗黒時代からのお流れである形式に律せられしめたくないと思つてゐる。我々に共通な熱と力と純眞の愛とから

生れ出でた赤裸々なものであらしめたい。勿論、その中に力強い一脉の流が絶えずあると云ふことは承認するし、これを龍南精神と名付け、所謂「剛毅朴訥」なる精神を永久に發達せしめ、向上せしめ、我の內的經驗の同伴とすべきであること、即ち龍南存在の意義は認めてゐるのであるが。只我々はその剛毅朴訥なる言葉に捉らはれてはならない、この四字はたゞ龍南精神の標語たるに過ぎないことを記憶してゐなければならぬ。或ひは之れを純真とでも云はゞ云はれるものである。吾人は文字に走ることなしに精神を捕へなければならぬ。今卑近な一例をとつて見れば、一人の男が剛毅朴訥を信條とする五高生であると云ふ、只それだけの理由の爲に破れた袴とボロ／＼の帽子を着けたとする、此人は龍南生たるの價値はないのだ、何となれば彼は剛毅朴訥の意味を知らないからである。抑龍南生となつた次の日から從來の生活態度を改めて所謂豪傑型に豹變すると云ふことが己に淺薄な行き方だと思ふ。我々は本来を明らかにせねばならない、龍南精神は無形のも

のである *desire* し難いものである只我々が龍南の圈内に身を投じて幾何かの時間の後、初めて之を眞に心に感じ肝に銘じ、口に云ひ難き中に精神に体得すべきものである。かくして後初めてその人の個性に従つて破れた衣となり、ボロ／＼の袴となるのである。我々は尊い個性がある。この生活の方式の根本要素ともなるべき個性の發展を妨げる生活を我々は認めることが出来ない。我々は龍南に於て個性の發展を見守らねばならない、夫々の個性を生ひ立たしめた時、龍南の精神と衝突することは決してない、人には又他方に順應性があるから、感化され得る力があるから。美に感化された時その人の個性とは決して牴觸することはない、却つてその輝きを増す我々が龍南精神に感化された時我々の個性は益々發展するであらう。かくして得たる強烈なる性格にして初めてよく自己の信ずる所を敢行することが出来るのである、要するに弊衣破帽は結果である。本ではない。在來の精神の結果である所の一形式を直ちに原因であり根本であると誤解してはいけない。

形式と泥んだら次は保守に傾くであらう、これが退嬰とならなければ幸ひである。保守は我々には窮屈である。龍南精神の發展が形式より來る所の保守的氣分に支配さるるかも知れない我々によつて阻止せられるとすれば、それは我々の恥辱であるかゝる時は夫れの正當な眞の意味に於ける進化を妨げるであらう、動あつての進化である固定した所にはぎこちなさを含むそこには自由な發達とした發達は望むことを得ないからである。我は龍南精神を一つの偶像として考へてはいけない、石の地像様そのものを拜む田夫野人の様に。我の努力せねばならぬとは力強いその精神によつて現はされる氣風、或は意氣の人格的向上でありその育みにある、崇拜が我の信仰を導くのではない崇拜と從つて理解とから生れ出でる自我の完成が信仰をつくるものである。

支那は東洋文明の源泉をなしてゐる、支那には古來幾多の天才が出でて人民の渴仰を得たその文化的功績は悉くこれ等天才の作る所である。支那の文明は特殊の天才階級の文明であつた、これが爲

に民衆は天才の偉業に憧れた彼等はこれを懂るるの極、これを崇拜し信仰し、遂には墨守してまでも古賢人の思想を尊んだ、そこに當然形式を生じた、古賢人を神化したのが爲に自由な批評を加ふること敢てしなくなつた、そこに文化は停滯してつたのである。固定して動くを得ないに至つたのである、宋、明、清の世にかけて特に賞揚すべき支那の文明を我々は見出すことを得ない。形式に流れし點に於て我々は決して支那民族のみを批難することは出来ない、我々は徳川時代に至るまでの日本文明に形式化の禍がいたした少なからざる弊害を思はねばならない。

あらゆる藝術に於て、百般の技術に於て我國は「家傳」なる習慣を最も重んじた。相傳によつて只縦に相續し横に發達することを必掛くるをしなかつた、かくて家傳の習慣は必然的に形式を具備した形式の存續の爲にはその「秘傳」の外に洩るることを恐れた、從つて到る所に偉大な技量を備へた流派があり乍らそれ等はいつまでも、どこまでも相並行した、技術の研究は師の秘傳を傳ふとのみに

止つたのである、かくして何で長足の發達を遂げ得やう、たとへ進歩があつても夫は遅々たるものである例へば今日の科學上からも驚くべく研究せられてゐると云はれる關孝和の數學も、その後何の進歩も見ず、民衆の學ぶ所ともならなかつた、世界を通じて最も精銳なりと稱せられる正宗の銘刀も絶對的秘密裏に相傳へられたに過ぎなかつた。當時の社會制度や民衆の思潮が之等の技術學藝を公開せしむるが如きものであつたならその文化はどうであつたらう。ギリシヤ人がその技藝の形式の墨守からオリンピック其の研究を發表することを拒んだとしたら決してあれだけの燦爛たる文明を建設することを得なかつたであらう。

委員選舉法の改善、運動の振興、それ等もたしかに必要である、だがその前に我々は考へなければならぬ、龍南と云ふものを根本的に理解せねばならない、それはグルントである。そうして我々自身の龍南であらしめたい、傳統の遺骸であらしめたくない。この意義を確立するのは龍南を代表する人々でなくて我々自身でなくてはならぬ。

一國の思想が思想家のみの思想でなく、民衆の思潮であるなら、龍南の精神は私の思潮が現す所のものでなければならぬ。

(一九二二、一、一六日夜)

寄 附

曩に本誌が三十年記念號を發刊するに當つて、印刷所秀榮舎が雜誌部に對し多額の寄附をして呉れたことは誠に感謝に堪へない。茲に特筆して同舎主の厚志を謝す。